

マタイ 5:3 の οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι は何を意味しているか？

木 原 桂 二

I. 問題の所在

「山上の説教」(マタイ 5-7 章) 導入部に位置する「至福の宣言」(マタイ 5:3-10) は、οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι⁽¹⁾ に向けられた「幸い」の宣言によって開始されている(マタイ 5:3)。それゆえ著者マタイが「霊において貧しい人々」という表現に込めた意味を捉えることは、「山上の説教」の使信を理解するための重要な手掛かりになると考えられる。

しかし「霊において貧しい人々」という言葉の意味を捉えるのは決して容易ではない。並行箇所となるルカ 6:20 のように「幸いだ、貧しい人々 (Μακάριοι οἱ πτωχοί)」と表現されているならば「幸い」と呼ばれているのは経済的に困窮している人々であると直ちに理解できるであろう⁽²⁾。それに対してマタイの場合は「貧しい人々」に「霊において (τῷ πνεύματι)」が添えられているため、この表現を巡る議論が尽きないのである。

その議論の詳細については本論の中で述べるが、とりあえず重要な点のみ指摘しておきたい。マタイ 5:3 を解釈する上で問題になるのは「貧しさ」という表現に経済的意味が込められているのか、または失われて完全に精神化されてしまったかどうかである。この問題を解決した上で、仮に後者の結論に至る場合、それはいかなる意味における「精神化」であるかという新たな問題も浮上することになる。

さらに「霊における貧しさ」が、自発的な行為による結果なのか、外的な要因によるものであるかという視点からもこの問題を考えることができる。前者の「自発的な行為によって自らを貧しくする人々」という解釈の場合は「謙遜に生きる人々」という倫理的な意味になり、ルカ 6:20 のような逆説性は認められない。「謙遜だから祝福される」という当然の見解を示すに過ぎない表現として理解されるからである。一方、後者のように「本人がそれを望んでいないのに貧しくさせられた人々」という解釈の場合、「霊において貧しい人々」は何らかの意味で「悲惨な状況に追いやられた

(1) 以下、οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι を暫定的に「霊において貧しい人々」と訳すことにより、この表現を指示する。

(2) Cf. I. H. Marshall, *The Gospel of Luke : A Commentary on the Greek Text*, NIGTC, Grand Rapids : Eerdmans, 1978, p. 249.

マタイ 5:3 の οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι は何を意味しているか？

人々」と見なされる。その結果、「悲惨であるにも拘わらず祝福される」という逆説が成立することになる。

以上、簡単ではあるが、このように見ていくと「霊において貧しい人々」の解釈をめぐって様々な捉え方があることが分かる。そこで本論文においては、マタイの意図に近い解釈を導き出すためにも、歴史的批判的研究の成果を踏まえつつ、至福の宣言の文構造と文脈を重視した解釈の試みを提示することにした。

Ⅱ. 解釈の可能性と問題点

1. 経済的視点による解釈の可能性

すでに指摘したことであるが、一般的な理解として「貧しい人々 (οἱ πτωχοί)」は経済的に困窮している人々を指している⁽³⁾。しかしマタイ 5:3 の場合は「霊において (τῷ πνεύματι)」という表現が添えられているため「貧しい」と形容された人々の状態をどのように理解すべきかが問題となる。つまりルカ 6:20 と同様に、経済的に困窮している人々が、それにも拘わらず「幸い」を宣言されているという逆説的な至福の宣言になっているのか、あるいは反対に経済的困窮者という視点は完全に失われ、何らかの意味で倫理的行為をする人々を指し示す表現になっているかを考えなくてはならない。

しかしその議論に入る前に、解釈上の困難を生じさせる「霊において」という表現が、マタイによる編集上の付加であるのか、あるいはオリジナルの Q 資料にあったものなのかという問題について関心を抱く向きもあると思われるので付言しておきたい。

おそらく、この問題については多くの研究者が判断しているようにマタイの付加であろう⁽⁴⁾。もっとも、経済的問題に特別な関心を抱くルカの方が「霊において」という言葉を削除した可能性も完全に否定はできない。だが、マタイ 5:6 においては単に「飢え渴く人々」ではなく「義に飢え渴く人々 (οἱ πεινῶντες καὶ διψῶντες τὴν δικαιοσύνην)」と表現されている。マタイは「義」という言葉を好んで用いている⁽⁵⁾ので、これはマタイによる編集上の付加と考えられる。それと同様にマタイは、

(3) マタイ 11:5//ルカ 7:22 (Q) 参照。ただし、H・ヴェーダー『山上の説教——その歴史的意味と今日的解釈』(嶺重淑/A・ルスターホルツ訳) 日本キリスト教団出版局、2007 年、64 頁によれば「ヘブライ語の語法においては、決して本来の物質的貧者ではなく、むしろ特定の貧者敬虔の代表者、すなわち、貧困を敬虔さの象徴と見なす者たちを意味する『貧しい』という形容詞の用法が存在する」という。しかしヴェーダーは、史的イエスがこのような象徴的意味で語ることはなかったと判断している(同書、64-65 頁参照)。

(4) 小河陽『マタイ福音書神学の研究——その歴史批判的考察——』教文館、1984 年、345 頁参照。

(5) マタイは「義」を意味する δικαιοσύνη を 7 回使用している。参考までに、他の福音書の使用回数はマルコ=0、ルカ=1、ヨハネ=2 となっている。

5:3 を編集する際にも、経済的困窮者が幸いを宣言されるという元来の伝承に同意できなかったか、あるいは独自の神学的理解を盛り込む目的で「霊において」の付加を行ったと考えられる。

それゆえ、マタイが元来の伝承をそのまま踏襲した上で、経済的困窮者に対する逆説的な祝福の視点を所持していると思ふことは困難となる。実際、積極的にこの種の解釈を主張する仮説を見出すことはできない。ただし、本田哲郎による当該箇所⁽⁶⁾の翻訳については例外的であるため、その根拠の妥当性について検討することにしよう。

本田は、マタイ 5:3 を「心底貧しい人たちは、神からの力がある」と訳し、その理由を次のように述べている。すなわち聖書学的な観点によれば、Pneuma は〈精神的貧しさ〉を表すものではあり得ず「もっとも深いところからとらえた人間まるごとを意味する」(傍点筆者)ものとして捉えるべきであるという⁽⁶⁾。

おそらく本田は「心底」という訳語を用いることにより、社会的な弱者として底辺に立たせられている「貧しい人たち」の状況を表そうとしていると考えられる。そういう意味で、本田の解釈には経済的視点が十分に残されている。というよりも、経済的視点がより深化された解釈であると言って良いであろう。しかしながら本田は「もっとも深いところからとらえた人間まるごと」の意で Pneuma を理解すると主張している⁽⁶⁾ので、精神的な意味合いが全く考慮されていないわけではない。つまり本田は、物質的困窮からもたらされる精神的痛手を読み取っていると考えられる。

さて、本田訳に反映されている意図が以上のようなものであるとして、この解釈は説得的なものと言えるであろうか。まず、我われにとって疑問と思われるのは解釈のための方法である。本田は、聖書学的見地によれば Pneuma は〈精神的貧しさ〉を表すものではあり得ず「もっとも深いところからとらえた人間まるごとを意味する」と主張している。このような本田の解説は一般向けの書物に記されているものであるため根拠が示されていない。そのために、この捉え方が妥当であるかどうかを検証したり議論を展開することはできない状況にある。

しかし、仮に最終的な結論として「霊において貧しい人々」が、本田訳のように「心底貧しい人々」を指すと解釈できるとしても、その根拠を Pneuma という語の解釈にのみ委ねて良いかが問われるべきと思われる。なぜなら、いかなる語を解釈する場合にも、その意味が歴史的に変遷する可能性があることを踏まえるべきだからである。一つの手掛かりとして、解釈の対象となるテキストに類似した内容を持つ、より近い過去の用例を参考にするのは極めて有効な手段である。だが、テキストの著者が

(6) 翻訳は、『小さくされた人々のための福音——四福音書および使徒言行録』(本田哲郎訳)新世社、2001年、42頁より引用した。テキストの解釈については、同書、19-21頁を参照した上で要約している。

歴史的に培われてきた意味を無前提にそのまま使用しているとは限らない。それゆえ、最終的には共時的な判断が必要となる。つまり著者マタイが「霊において貧しい人々」という表現に込めた意味は、マタイ自身のテキストの文脈から導き出されるべきなのである。

「問題の所在」でも手短に触れておいたように、本論文においては、このような共時的判断に基づく解釈の可能性の追求を試みる。もちろん、その手法は通時的判断と対立するものではない。歴史的に培われてきた意味を著者（マタイ）がどのように解釈し（通時的）、それを自らのテキストにどう反映しようとしたかを総合的に理解すること（共時的）が、我われの課題なのである。しかし本田の解釈以外にも、通時的な視点に基づく解釈の可能性が主張されているので、さらにこの観点に基づく捉え方について検討を加えたい。

2. 精神的側面による解釈の可能性

前項において取り上げた本田訳のように「霊において」は精神的な意味ではないとする見解もあるが、精神的な側面を読み取る解釈が多数を占めている。しかし「精神化」を読み取る場合にも、その捉え方について多様な見解がある。どのような意味における精神化であるかという点において、解釈者の強調点が異なっているからである。以下、これらの解釈を取り上げて検討することにした。

①倫理的解釈

G・シュトレッカー⁽⁷⁾は、πνεύματι という与格を「関連の与格」と取ることにより、人間の霊に関する「貧しさ」という理解を示している。では「(人間の) 霊に関する貧しさ」は何を意味していると考えられるのだろうか。シュトレッカーによると「貧しさ」は財産の所有とは関係ないものであり、経済的視点は失われている。むしろ、この表現は人間の姿勢を意味するものであり、具体的には、マタイ 6:2; 23:1 以下に描かれているような、パリサイ人と律法学者における高い自己評価に対峙するものであるという。つまり、マタイにおけるこの慰めの言葉は自らを低く考える「へり下った」人間に向けられるものであり、ここに倫理を見ることができると結論づけられる⁽⁸⁾。

さらに、シュトレッカーはこの捉え方を支持する根拠として、クムラン文書の『戦

(7) G・シュトレッカー 『山上の説教』註解（佐々木勝彦・庄司眞訳）ヨルダン社、1988 年。

(8) 同上、59 頁。また、U・ルツ 『EKK 新約聖書注解 I/1 マタイによる福音書（1-7 章）』（小河陽訳）教文館、1990 年、292-294 頁；嶺重淑 「心の貧しい者とは誰か？——マタイ 5:3 の解釈をめぐって——」 『関西学院大学 キリスト教と文化研究』（関西学院大学キリスト教と文化研究センター）第 8 号、2006 年、23-29 頁も、第一至福の宣言に倫理化の傾向が見られると結論づけている。

いの書』(1 QM) の言葉を示している⁽⁹⁾。このテキストはマタイ 5:3 を解釈するための手掛かりとしてよく引き合いに出されるので、今後の議論のためにも、その日本語訳を以下に示しておくことにしたい⁽¹⁰⁾。

^{14:5} 彼は驚くべき〔御力〕に躓く者たちを呼び寄せ、諸々の民の集まりを集めて残る者なき滅びに至らせ給うた。⁶ 唾の口を開いて〔神の御力〕を歌わせ、なえた〔手に〕戦いを教え給うた。また膝ふるえる者らに立つ力を、打たれた肩に腰の強さを、与え給うお方。⁷ また霊の貧しい者たちによって、〔 〕頑なな心〔 〕道を全うする者たちによって、悪しき民らはみな滅ぼされ、⁸ その強者どもはみな立場を失う。

シュトレッカーは、1 QM 14:7 における עֲנִי רִיחַ (霊の貧しい者たち)⁽¹¹⁾ が תְּמִימֵי דָרֶךְ (道を全うする者たち) と並列句になっている⁽¹²⁾ ことに注目する。ここから「霊の貧しい者たち」は「道を全うする」という倫理的な行為をする人々であるという理解が生じる。その上でシュトレッカーは「山上の説教のイエスは、謙遜な者、つまり自らの限界を知り、そしてこのような知恵をそれにふさわしい態度で具体化する人々に語りかけているのである」⁽¹³⁾ と述べ、第一至福の宣言の意味を要約する。

こうしたシュトレッカーの解釈は「霊において貧しい人々」という表現についての伝承史的判断とマタイ福音書の倫理観を関連させたものであり、その方法論について特に異論はない。しかし仮にシュトレッカーが根拠として用いる『戦いの書』の理解がその通りであるとしても、果たしてマタイの倫理観とそれが関連しているとする主張に説得性が認められるだろうか。

確かにマタイが、パリサイ人と律法学者の高い自己評価を批判しているのは紛れもない事実である。しかしそのようなマタイの倫理的意識が『戦いの書』の「道を全うする」という表現に対応しているかどうかは、必ずしも自明ではない。つまり『戦いの書』における「霊の貧しい者たち」を倫理の行為者であるとして見なすことが可能であるとしても、それを「謙遜な人々」であるとして同定できるかどうかが問題なのであ

(9) シュトレッカー、前掲書、59 頁。

(10) 引用は、日本聖書学研究所編『死海文書——テキストの翻訳と解説——』山本書店、1963 年、144 頁。

(11) 以後、1 QM 14:7 のヘブル語表現とマタイ 5:3 のギリシア語表現とを区別するため、前者を「霊の貧しい者たち」として、後者の「霊において貧しい人々」(ギリシア語からの訳)と便宜的に訳し分けておく。

(12) シュトレッカー、前掲書、85 頁。ここでシュトレッカーは倫理的側面を論証する並列句だけを取り上げているが、ルツ、前掲書、294 頁は、רִיחַ עֲנִיを「絶望」の意に解釈できる先行の文脈があることを指摘している。それゆえ、シュトレッカーの解釈には不十分さが認められる。

(13) シュトレッカー、前掲書、59 頁。

マタイ 5:3 の οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι は何を意味しているか？

る。

あるいはシュトレッカーは、マタイの倫理観と『戦いの書』のそれとの内容的な違いを問題にしているわけではないとも考えられる。両テキストに「倫理」という課題が共通に認められるという点だけを強調したかったのかもしれない。しかし仮にそうであるとしても、マタイの文脈上「霊において貧しい人々」が「謙遜な人々」を指し示すとする説得的な根拠が示されているとは思われないのである。

なぜなら、シュトレッカーが参照すべきテキストとして提示する 6:2 と 23:1 以下は、第一至福から離れた文脈に位置しているからである。同じ「山上の説教」の一部であるマタイ 6:2 でさえ、直接的な文脈とは言い難いほどの距離がある。そこで我われは「至福の宣言」（マタイ 5:3-10）の枠組みの中で判断できることに加え、この宣言が語られた背景となる状況設定（マタイ 4:23-25）との関連性について考察することにした。

ただし、まだ検討すべき仮説が残されているので、我われの問題意識に基づく考察は、Ⅲ. において行うことにする。

② 霊的悲慘と捉える解釈

H・ヴェーダー⁽¹⁴⁾もシュトレッカーと同様に「原文は不確か」であるとしつつも、マタイ 5:3 と 1 QM 14:7 の関連性を指摘している⁽¹⁵⁾。しかし同じテキストを根拠としているにも拘わらず、その解釈はシュトレッカーのものとは異なっている。

ヴェーダーによれば、14:7 の文脈は次のような内容を示している。すなわち「蹟く者たちはそこで神によって英雄的行為へと呼び寄せられ、怯む心は高められ、黙りこんだ者の口は開かれ、また膝がぐらつく者に対してしっかりと立つ力が授けられる。私見によれば、これらの表現はすべて、無資産、絶望、無力さの状況がここでは問題になっていることを指し示している」（傍点筆者）⁽¹⁶⁾ というのである。

前述のシュトレッカーの場合は「霊の貧しい者たち」の意味を特定する語を、その直後に置かれている「道を全うする者たち」に見ていた。しかしそれに対してヴェーダーは、1 QM 14:7 の直前の文脈との関連性を見出した。その結果『戦いの書』における「貧しさ」は「霊との関係において悲慘な」を意味しており、従順さによってへり下った者を指すのではないとする見解に至るのである⁽¹⁷⁾。

(14) ヴェーダー、前掲書。

(15) 同上、69 頁。

(16) 同上。

(17) E・シュヴァイツァー『山上の説教』（青野太潮／片山寛訳）教文館、1989 年、25 頁によれば「……クムラン文書では、神の霊が彼らをそうしたので彼らは貧しいのか、それとも彼らの人間の霊が自らそのように感じるから貧しいのか、ということは、もはや明確には区別できない」（傍点筆者）という。ヴェーダーは、עֲנֵי רִיחַ を倫理的に解釈できる תְּמִימֵי דָרֶךְ（道を全うする者たち）という並行ノ

さらにヴェーダーは、文脈から導き出される前述の解釈に加え「霊の悲惨な者」は「自分たちの知恵に関して途方にくれる者」を指していると述べる。もし自分の従順さによって自分の知恵を終わらせるのであれば、もはやその人は自分の知恵に関して途方にくれる者ではあり得ない。だから必然的に神の前のへり下りの有効性は無に着せられて絶望することになり、同時に神の知恵が彼らに届けられることになるという。その上でヴェーダーは、こうした理解がマタイにも踏襲されている可能性を示唆する⁽¹⁸⁾。

また、これに続けてヴェーダーは、マタイ 5:3 の「霊」が「人間の霊」と「神の霊」のどちらを指し示すかという問題について言及している。第六至福であるマタイ 5:8 に見られる「純粋な心の (οἱ καθαροὶ τῇ καρδίᾳ)」という表現において、第一至福 (5:3) と同じ与格が用いられている⁽¹⁹⁾ため、人間の霊に関する貧者という理解が成り立つという。この場合は「内的に貧しい、霊的に貧しい、彼らの知恵に関して途方にくれている」といった意味で、人間の霊として理解される。

しかしそれにも拘わらずヴェーダーは、こうした理解と「神の霊に関して無資産の」という意味は完全には区別できないと述べる。なぜならその当時、人間の霊は、神の霊によって貫き通され、悟りに至った霊だからである⁽²⁰⁾。それゆえ、マタイにおける第一至福は包括的な意味での「霊的な貧困」を意味するものと捉えられる。この言葉によって表されているのは、人間と神との関係と同様に、人間の知恵の領域における無資産なのである。

以上のように、ヴェーダーは『戦いの書』の解釈を手掛かりにしながら、マタイ 5:3 の「霊において貧しい人々」は「自分たちの知恵に関して途方に暮れる者たち」を指すと結論づけた。果たしてその理解を、マタイのテキストの文脈を基に論証できるだろうか。この点に関してヴェーダーは、その方向での考察に着手しなかった。

しかしその代わりにヴェーダーは、自ら導き出した見解を歴史的な文脈に適合させることにより「地の民 (イエス時代の貧しい農民)」の存在を浮かび上がらせた。その捉え方によれば「地の民」はトーラーを学べないために知恵を持たず、宗教的生活を満たすことができなかったのも、霊的に評価されていなかった人々である。この理解は、経済的に貧しい人々への幸いを宣言するオリジナルの Q 伝承とは異なるもので

＼ 句に言及していないが、反対にシュトレッカーはヴェーダーが指摘する文脈に触れておらず、共に考察の不十分さが認められる。それゆえ、シュヴァイツァーの見解は公平な判断に基づくものと見なされる。

(18) ヴェーダー、前掲書、69 頁。

(19) こうした与格の用例はマタイ 5:8 の他に、ταπεινούς τῷ πνεύματι (詩 33:19 [LXX])、ζέων τῷ πνεύματι (使 18:25)、ἀγία τῷ πνεύματι (I コリ 7:34) 等に見出すことができる。Cf. W. C. Allen, *Critical and Exegetical Commentary on the Gospel According to St. Matthew*, ICC, Edinburgh, ³1912, p. 39.

(20) ヴェーダー、前掲書、69–70 頁。

マタイ 5:3 の οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι は何を意味しているか？

ある。しかし祝福に値しない人々が「幸い」を宣言されるという意味において、その逆説性は認められる。

さて、こうしてヴェーダーはシュトレッカーと同様、クムラン文書とマタイのテキストとの関連性を考慮したのだが、結果としては異なる解釈が導き出されることになった。シュトレッカーは「霊の貧しい者たち (עֲנִיִּי רִיחַ)」の直後に見られる並列句、すなわち「道を全うする者たち」との文脈的関連性を見出したが、他方ヴェーダーは直前の文脈の方に注目し「自分たちの知恵に関して途方に暮れる者たち」という意味を読み取ったからである。マタイ 5:3 の意味を捉えるために、クムラン文書のテキストに見られる類似表現を参考にする手法そのものは正しいと認められる。しかし、その考察が両者とも総合的ではなかった点に問題がある。

さらに、これはどちらの研究手法にも言えることであるが、1 QM 14:7 の解釈を基にしてマタイ 5:3 の表現を理解しようとする際に、肝心のマタイの文脈に考慮が払われていない点に大きな問題性が認められる。もっともシュトレッカーについては、多少その努力の跡がうかがえた。だが、すでに指摘したようにマタイ 5:3 と直接関係する文脈の考察がなされていなかった。つまりクムラン文書とマタイのテキストのどちらを考察する場合にも、前後の文脈への考慮が欠けていたのである。

そこで我われは、以上の問題点を踏まえた上で、マタイ 5:3 を含む「至福の宣言」の構造と、その文脈的関連性に十分な注意を払った考察を行いたい⁽²¹⁾。1 QM 14:7 については、シュトレッカーとヴェーダーの考察結果があるので、これらの理解を踏まえた上で、マタイのテキストとの関連性についてさらなる考察を行いたい。

Ⅲ. 文脈と文構造の分析による解釈

これまで主要な解釈を取り上げて、それぞれの仮説の特徴と問題点を指摘したが、そこから浮かび上がってきた課題を確認しておきたい。それは以下の二点にまとめら

(21) D・ヒル『ニューセンチュリー聖書注解 マタイによる福音書』（大宮謙訳）日本キリスト教団出版局、2010 年、131-132 頁は、「長期間の経済的、社会的貧困のため、神にのみ信頼を置いている人々」を意味するヘブル語 מְאֲנִים が LXX では πτωχοί と訳されることがあるため、マタイでも同じ意味で用いられていると見なしている。その上でヒルは、マタイが「心の」を追加することで意味を明確化したと説明する。このような、マタイによる「神への信頼」の明確化や強調が行われたとする理解には同意できる。しかしヒルは πτωχοί の語に込められている「経済的、社会的貧困」に関するマタイ独自の捉え方について説明していない。つまり「貧困」それ自体がマタイによって精神化されて「謙り」を意味するようになったのか、あるいはマタイが経済的・社会的に困窮している者が神を信頼するようになった事態を表そうとしているかを明確にしていないのである（cf. D. Hill, *Greek Words and Hebrew Meanings: Studies in the Semantics of Soteriological Terms*, Cambridge: Cambridge University Press, 1967, pp. 234, 251）。やはり、この問題を解決するためには οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι という表現の通時的な分析だけでは不十分であるため、文脈に基づく考察によってマタイの編集意図を論証すべきであろう。

れる。

- ① 「霊において貧しい人々」は経済的困窮者であるのか。あるいは、それとは別の状況に置かれた人々を指し示しているのか。
- ② 「霊において貧しい人々」は倫理の行為者であるのか。

以上のように、第一至福には二つの大きな問題があると見られるため、その捉え方によって解釈の幅が広がることになる。そこで我われは可能な限りマタイの編集意図に即した解釈を得るために、至福の宣言の文構造と文脈に着目する考察を行いたい。

1. 「霊において貧しい人々」はどのような状況に置かれた人々なのか

この問題については、かねてから論じられているように、マタイは「霊において」を付加することによって「貧しさ」の精神化を図っていると考えられてきた。しかしそれでも元来「貧しさ」という言葉は経済的貧困を表すものであるため、経済的・物質的困窮者を意味するという解釈を完全に捨て切れていない捉え方も見出される。

この点に関して、ヴェーダーは精神化された解釈に固執しつつも、そこから派生する経済的問題についても視野を広げようとしている⁽²²⁾。ヴェーダーによれば「霊において貧しい人々」という表現は「自分たちの知恵に関して途方に暮れる者たち」を指し示すものであった。しかし、そのように表現される人々は歴史的な文脈から判断して「地の民」を指すと考えられるので、彼らを経済的困窮者と見なすことが可能になる。つまりヴェーダーは「霊において貧しい人々」という表現から直接的に経済的困窮者という理解を得ているわけではなく、その点で本田の解釈とは異なっているのである。

ところで、マタイ自身は「霊において貧しい人々」を経済的困窮者と見なしているのであろうか。ヴェーダーが指摘する歴史的な文脈という領域に踏み込む前に、マタイのテキストの直接的な文脈に基づく考察を試みることにしたい。

まず、重要な手掛かりになるのは第四至福（5:6）であると思われる。すでに指摘したように、マタイは第四至福において「飢え渴き」の対象を「義」とすることによって物質的困窮に他の側面を付加している。あるいは「飢え渴き」の意味そのものを変質させていると言ってもよい。並行箇所となるルカ 6:21 を引き合いに出すまでもなく、本来的に「飢え渴き」は食糧に対するものであり「義」という宗教的概念に対するものではなかった。しかし、おそらくマタイは食糧を渴望する人々について言及

(22) ヴェーダー、前掲書、71-74 頁。

マタイ 5:3 の οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι は何を意味しているか？

するオリジナルの Q 伝承を改変し「義への飢え渇き」を表現するように編集したのである。

それゆえ、こうしたマタイの編集的傾向を踏まえるならば、第一至福の「霊において貧しい人々」という表現もまた、経済的・物質的困窮の意味を失わせるものになっている可能性が高い。単純に、それを「精神化」と言い表せるかどうかはともかくとして、意味の改変が行われているのは明らかである。

その上で次に考えたいのは「霊において貧しい人々」が指し示す直接的な対象である。これについては文脈的な判断が必要であり、我われは「至福の宣言」の直前に位置するマタイ 4:23-25 との関連性を考慮すべきと考える。以下、その理由を説明したい。

「山上の説教」の導入部となるマタイ 5:1 によれば、イエスは「群衆を見て (ἰδὼν δὲ τοὺς ὄχλους)」山に登り説教を語り始めた。それゆえ「山上の説教」全体の語りの中で、この「群衆」が絶えず意識されていると想定することが可能となる。ただその場合、群衆とはどのような人々であるかが問題になるが、それについてはマタイ 4:23-25 に明示されていると捉えられるであろう。具体的には 24 節が示しているように、群衆のほとんどは病気を抱えていた人や悪霊につかれた人で構成されていた。

それゆえマタイ 5:3 の「霊において貧しい人々」は、このような人々を指し示していると捉えられる。つまり、彼らは「悲惨な状況に追いやられた人々」であると見なされるべきであり、これがマタイの文脈から導き出される判断である。また、この捉え方が的を射ているならば「霊において貧しい人々」は、シュトレッカーが主張するような「自らへりくだる者」ではあり得ない。彼らは、やむを得ない事情によって悲惨な状況に追いやられた人々だからである。

また、この解釈はヴェーダーが示す『戦いの書』の解釈にも関連している。1 QM 14:7 の直前の文脈との関連によれば「霊の貧しい者たち」は霊的な絶望者であったからである。このような 1 QM 14:7 とマタイの共通点もまた、我われの捉え方の傍証になるであろう。

2. 「霊において貧しい人々」は倫理の行為者であるのか

前項において我われは「霊において貧しい人々」が悲惨な状況におかれた人々であることを確認した。しかしその結論は、マタイ 5:3 の直前の文脈との関連性から導き出されたものに過ぎなかった。また、伝承史的に関連があると見なされる 1 QM 14:7 の解釈もまた同様に直前の文脈に基づくものであった。それゆえ我われは直前の文脈による解釈に満足すべきではなく、後続の文脈との関連性に注目することにより、問題となっている表現の意味をより鮮明にしなければならない。

そのために、我われはマタイ 5:3 に端を発する「至福の宣言」全体の構造の分析を試みることにしたい。とりあえず、テキストを試訳によって示すと以下になる。

^{5:3} 幸いだ、霊において貧しい者たち。

天の王国は彼らのものだからである（ὅτι αὐτῶν ἐστὶν ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν）。

⁴ 幸いだ、悲しんでいる者たち。彼らは慰められる。

⁵ 幸いだ、柔和な者たち。彼らは大地を受け継ぐ。

⁶ 幸いだ、義に飢え渴く者たち。彼らは満ち足りるようになる。

⁷ 幸いだ、痛みに関心する者たち。彼らは痛みに関心してもらえる。

⁸ 幸いだ、心の清い者たち。彼らは神を見るであろう。

⁹ 幸いだ、平和をつくり出す者たち。彼らは神の子と呼ばれる。

¹⁰ 幸いだ、義のために迫害されてきた者たち。

天の王国は彼らのものだからである（ὅτι αὐτῶν ἐστὶν ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν）。

「至福の宣言」の構成上、見過ごすことが出来ないのは、第一至福（5:3）と第八至福（5:10）が枠構造（inclusio）を形成している点である⁽²³⁾。ὅτι αὐτῶν ἐστὶν ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν（天の王国は彼らのものだからである）という表現が両テキストにおいて完全に一致しているため、その関連性が明らかに認められる⁽²⁴⁾。

果たして、その構成から何を読み取ることかできるだろうか。5:3 と 5:10 に共通する「天の王国は彼らのものだからである」という言葉は「霊において貧しい人々」（5:3）と「義のために迫害されてきた人々」（5:10）が「幸い」と呼ばれる根拠として機能している。つまりマタイによれば「霊において貧しい人々」と「義のために迫害されてきた人々」は、共に天の王国の住人なのである。それゆえ、マタイの文脈的判断から「霊において貧しい人々」を義の行為者と見なすことが可能となる。

また、このことは「義に飢え渴く人々」（5:6）という表現を作り出したマタイの意図にも関係していると考えられる。すでに指摘したことだが、オリジナルの Q 伝承には「義に（τὴν δικαιοσύνην）」という言葉はなく、単に「幸いだ、飢え渴く者

(23) D・R・A・ヘア『現代聖書注解 マタイによる福音書』（塚本恵訳）日本キリスト教団出版局、1996年、81頁参照。Cf. W. F. Albright/ C. S. Mann, *Matthew*, AB 26, New York: Doubleday, 1971, p. 48.

(24) Cf. H. D. Betz, *The Sermon on the Mount: A commentary on the Sermon on the Mount, including the Sermon on the Plain (Matthew 5: 3-7: 27 and Luke 6: 20-49)*, in A. Y. Collins (ed.), *Minneapolis: Fortress Press*, 1995, p. 110; M. Stiewel/ F. Vouga, *Die Bergpredigt und ihre Rezeption als kurze Darstellung des Christentums*, Tübingen/ Basel: Francke, 2001, p. 36.

マタイ 5:3 の οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι は何を意味しているか？

たち (μακάριοι οἱ πεινῶντες καὶ διψῶντες)」となっていたか、あるいはルカ 6:21 のように「幸いだ、飢えている者たち (μακάριοι οἱ πεινῶντες)」であったに違いない。つまり元来は、食糧難に苦しむ人々に対して「幸い」が宣言される内容であったものにマタイが編集の手を加え、「義」という宗教的倫理の実践を熱心に求める人々に対する「幸い」の宣言に書き改めたのである。それゆえ、マタイ 5:3 の「霊において貧しい人々」を「義」という宗教的倫理の行為者として提示しようとするマタイの編集意図と、5:6 において表現されている内容は一致すると判断できよう。

また、この捉え方は『戦いの書』の解釈にも通じるものがある。ここで再び、シュトレッカーによる 1 QM 14:7 の解釈を取り上げたい。14:7 の「霊の貧しい者たち」は、それに後続する「道を全うする者たち」と並列の関係にあった。それゆえ『戦いの書』における「霊の貧しい者たち」は倫理の実践者であると判断できる。こうして『戦いの書』とマタイのテキストは、倫理の実践への言及が後続のテキストに示されている点で一致していると見なされることになる。

その上で、これまで確認してきたことを総合的に判断するならば、「霊の貧しい者たち」を中心に、直前の文脈では「霊的な絶望者」が、後続のテキストでは「倫理の行為者」が指し示されるという点において、1 QM 14:7 とマタイ 5:3 の文脈には構成上／内容上の類似性が認められることになる。それを表にすれば、以下のようになるであろう。

	直前の文脈	解釈を必要とする表現	直後の文脈
戦いの書	霊的な絶望者	עֲנִיִּי רִנָּה (霊の貧しい者たち)	道を全うする者たち
マタイ福音書	病気に苦しむ人々や悪霊につかれた人々など	οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι (霊において貧しい人々)	義を行う人々

上記に示した構成と表現の内容がマタイの意図に合致したものであるとするならば、「霊において貧しい者たち」の意味は、次のように解釈できる。

マタイは絶望的な状況に置かれた人々を目の前にしながら（あるいは思い浮かべながら）、彼らを「霊において貧しい人々」と呼び表している。具体的にはマタイ 4:23 以下が示すように、あらゆる病気に苦しむ人々や悪霊つきと呼ばれた人々を指し示すが、その絶望の意味は身体的・精神的苦しみによってもたらされるものばかりではない。それも重要な問題ではあるが、それ以上に重視されるのは、彼らが神の祝福に値しない者として取り扱われていたことである（マタイ 9:36 参照）。その点において「霊において貧しい人々」を、歴史的な「地の民」と同一視するヴェーダーの見解は的を射たものであると判断できる。

しかしマタイによれば「霊において貧しい人々」は、単なるあわれみの対象ではない。イエスによって「幸い」であると宣言された彼らは、「義」の行為者として新たな歩みを始める存在として描かれているからである。それゆえ「霊において貧しい人々」は、義という倫理の行為者であるから「幸い」が宣言されているのではない。そうではなく、価値なき者であるにも拘わらず「幸い」を宣言されたからこそ、義を行う者として歩みを始めるのである。

IV. 結語

従来の研究において、マタイ 5:3 の「霊において貧しい人々 (οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι)」を解釈する際に、クムラン文書の『戦いの書』(1 QM 14:7) が重要な手掛かりを与えるものと考えられてきた。稀に見る表現の類似性という観点からすれば、この手法が的を射ていることは明らかであろう。

しかし本論において指摘したように、一つの表現の意味が前後の文脈から導き出されるという視点が見過ごしにされてきたために、文章の流れを読むという解釈の基本が見失われていたように思われる。それと同様の問題は、マタイのテキストを解釈する際にも見られた。そこで我われは『戦いの書』と「至福の宣言」の両方のテキストにおいて、前後の文脈を踏まえた解釈を試みた。特に後者に関しては、その文構造の特徴にも踏み込んでいる。

その結果「霊において貧しい者たち」は、宗教的に価値なき者と見なされた身体的・精神的絶望に苦しむ人々(=「地の民」)であると捉えられる。イエスは、そのような彼らに向けて「幸い」を宣言し、神の祝福を約束した。こうして勇気づけられた彼らは、イエスによって示された「義」の実践者として歩むように期待されている。おそらくこれが、οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι という表現に込められた意味であろう。